



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」106号
Issue Date	2000-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66387
Type	journal
File Information	yuin106.pdf





拾 蔭

Yuin 北海道大学附属図書館報

目 次

「図書館と博物館」	教官著作寄贈図書 ……………13
小泉 格教授（総合博物館・館長） ……………1	会議 ……………14
ライブラリーセミナー特集	人事往来 ……………15
・附属図書館ライブラリーセミナーへの誘い ……6	
・医学部におけるデータベース検索ガイダンス …7	
お知らせ	
①北海道大学附属図書館講演会が開催されました 10	
②北分館の閲覧室改修について ……………11	

博物館と図書館

総合博物館長 小泉 格（大学院理学研究科教授）

はじめに

「北海道大学総合博物館」は、ユニバーシティミュージアムの第4館目として、平成11年4月に発足した。大学院重点化構想が全学的に展開される中で、それらの最先端機能を有機的に統合させるインターファカルティ構想が新たに生まれた。その背景には、開学以来のリベラルアーツの伝統に基づくフロンティア精神・国際性・全人教育を理念とする「クラーク精神」があった。この「クラーク精神」と「エコキャンパス構想」とが、総合的な研究教育や実践的体験教育の場としての総合博物館の実現を可能にした。

「総合博物館」の特徴としては、エコミュージアム構想やサテライト構想など多数あるが、特徴

の一つとして北方圏に関わる博物館情報交流センター構想がある。北方圏の自然と文化に関する既存の学問領域を超えて北方圏の重要性を再認識するような斬新で統合的なプロジェクトを、教育と研究のために企画・立案・実施するのであるが、このことが検討され始めた段階において、多数の古い地図・図の類や絵画、写真、古文書などを保存・管理している附属図書館の「北方資料室」との関係はどう設定するかという問題から始まって、博物館と図書館との関係を考えるようになった。この誌面では、博物館一般、ユニバーシティミュージアム、総合博物館と図書館について述べる。

「博物館」の概念

博物館の一般的な概念としては、1975年の「国際博物館評議会」規約に「博物館とは、公衆に開かれ、社会とその発展に奉仕し、かつまた、人間とその環境との物的証拠に関する諸調査を行い、これらを獲得し、それらを保存、報告し、しかもそれらを研究と、教育と、レクリエーションを目的として陳列する、営利を目的とせぬ恒常的な一機関である」という定義がある。1951年に制定されたわが国の「博物館法」は「博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館法（昭和25年法律第118号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、民法（明治29年法律第89号）第34条の法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人が設置するもので第2章の規定による登録を受けたものをいう。」と定義している。

このわが国の博物館定義は1951年に制定された「国際博物館評議会」の規約におおむね従っているのだが³、「国際博物館評議会」の規約は社会風潮が凡そ10年毎に変革するのに合わせて見直されているにもかかわらず、わが国の法律は50年前に制定されたままで現状に合致していない。この時代錯誤による「博物館法」の欠陥が博物館活動に以下のような重大な支障をもたらし、わが国の科学水準を低下させている。すなわち、調査研究を副次的に評価しているために、学術と行政の境界及び権限と責任の所在が曖昧となっており、現場では有能な「学芸員」が雑務処理に追われ専門知識を充分に発揮できずにいること、図書館を博物館から除外しているために本来「文化財」として一体であるべき一次資料（標本そのもの）と二次資料（図書その他の文字・画像・音響・点字などの資料）の関係が明確でなく、分離分割されて管理（保存）・運営（情報伝達）・利活用（教

育啓蒙）されていることである。

「学芸員」の雑務問題

「博物館法」では、館長のほかに「専門的職員として学芸員を置く」とし、学芸員の職務を「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関係する事業についての専門的事項をつかさどる」と規定している。しかし、学芸員の資格を有している大学卒業生の専門職への就職率はわずか数%であり、しかもせっかく専門職に奉職できたとしても、実際には「その他これと関係する事業」（雑用）に終始しているのが現状である。こうした弊害の源は、行政的な博物館の許認可権が都道府県の教育委員会にあること、及び博物館業務に関わる学術的な判断をするために博物館協議会が設置されているが⁴、協議会委員の任命権は同じく都道府県教育委員会にあること、によって、行政と学術の境界が曖昧であること、権限と責任の所在が曖昧であることによって、「博物館」事業が十分に機能していないことにある。図書館という施設運営のノウハウに関わる実学を「図書館学」というとすれば、博物館の維持・管理・運営・在り方をつかさどる実学としての「博物館学」を国のレベルで一日も早く確立すると共に、現状の学芸員制度を見直して、「博物館」としての在るべき実体で維持・管理・運営できるようにすべきである。

「博物館」と「図書館」の分離問題

欧米の「博物館」では、自然界を構成している事物とその変遷に関する資料、科学技術の基本原則とその歴史に関する資料、科学技術に関する最新の成果を示す資料などを扱う「自然系博物館」（科学博物館、自然史博物館、植物園、動物園、水族館など）、考古、歴史、民俗、造形美術など人間の生活と文化に関する資料を扱う人文系博物館（美術館、図書館、文書館、歴史資料館、記念建造物、考古学的遺構など）、及びそれらを統合した「総合博物館」が主体であり、それに自然公園、各種の科学センター、プラネタリウムなどが

追加されている。

各学問分野は、様々な「物」や「事物（事象）」を研究対象として、分析や解析、思考され、それらの研究結果を専ら「文字」で発表すると同時に、研究対象である「物」の収集と保管をはかる一方で、研究結果を「物」でもって展示する空間としての（個別的な）博物館を先進国は時間をかけて整備してきた。「物」を取り扱う所が「博物館」であって、「文字」としての書物や本を取り扱う所が「図書館」であるとすれば、わが国における両者の違いがはっきりとわかるであろう。社会全体が貧困な状況では、基盤である物に根差した本格的な学術的過程を経て物事の因って来る所以を追求することが経済的にできないために、先進国で成就した研究結果としての文字のみを輸入して教育や研究の糧とせざるを得ない。わが国における経済発展と技術革新が、昨今の豊かさと博物館ブームをもたらしたのであるが、一過性の流行事としてではなく一般市民の日常生活のなかに知的好奇心が確かに根付いた証であって欲しいと願うのである。一般市民が何かを学びたい、何かを知りたい、何かをみたい、心の安らぎを得たい、という願望をもって「博物館」を訪れて欲しいのである。また、図書館は無料であるが、博物館は有料であることは、わが国における両者への歴史的価値観が端的に表われており、そのことが公的資金の使われかたとなっているのである。このことは是正すべき重要問題である。

ユニバーシティ・ミュージアムの設置

現行の「博物館法」の欠陥は、学術審議会学術情報資料分科会が1995年に中間報告した「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」において大幅に解消されている。すなわち、大学において収集・生成され、学術研究・教育の推移と成果を明らかにする精選された有形の学術標本を整理・保存・分類・収蔵する、情報提供、公開・展示、学術標本群の充実やその有効利用を図るとともに、学術標本を基礎とした先導的・先端的な研究を促進する、教育などを設置理由としている。

これらを成就するために、「北海道大学総合博物館」は国立学校設置法に基づく教育研究機関として設置されたのであって、博物館法に基づく博物館とは性質を異にしている。一般博物館では実現し難い実験的な試行を行うパイロットミュージアムである。また、従来の単位認定による一般学芸員の教育育成とは区別される高度な専門知識と博物館の管理・運営法を教育する場とし、新たな上級学芸員を社会へ送り出すと同時に、一般博物館勤務の学芸員をリフレッシュ教育する組織を考える必要がある。

「収藏品目録」の作成

北海道大学に収蔵されている学術標本や資料を分類・整理・登録し、組織的な保管・管理を図るために文字と画像によるデータベース化（収藏品の目録作成）が平成9～11年度の総長裁量経費及び科学研究費補助金によって促進されている。データベースは標本や資料についての正確な記述による特性及び多様な情報を公開するために必要であるし、データベース化された標本・資料は保管場所と分類に関する情報へのアクセスが容易となり、研究・教育に寄与することができる。しかし、特定の専門分野で作成されたデータベースは難解な学術用語が用いられていたり、ある特性だけが記述されているといった状況のために異分野でそれを直接利用することが一般に困難である。そのために語句の意味によって分類・配列したシソーラスを作成してデータベースの汎用性を高める必要があるし、オンラインでの情報検索をするために用語の標準化が必要になる。博物館事業の一つとして、研究対象となる標本や資料を観察して記述する際に用いられる専門用語の語義範囲を明確に限定して置く辞書をジャンル別に編纂することが考えられる。

キャンパス内の「歴史建造物」

「総合博物館」は古い学術標本類を収蔵・保存すると共に、絶えずそれらを新しく利活用するための見直しをする必要がある。その上での展示公

開には、大学全体、そして地域との連携を盛り込みながら、歴史との「共生」を意識した現在との接点で常に展示公開をする必要がある。この意味で、北海道大学の歴史を物語る「歴史建造物」や周辺の環境は「博物館」事業の対象であると考えられ、現在、平成11年度総長裁量経費によって「札幌キャンパスの自然と文化史」を学際的に検討している。地球環境科学研究科の平川教授は米軍撮影の航空写真から5,000分の1の詳細な地形図を復元中であり、工学研究科の越野教授はキャンパス内の歴史建造物のCG作成と旧農学部本館の40分の1復元模型を製作中である。林学教室(古河講堂)が竣工当時(明治42年)の状態に化粧直しをされ、また重要文化財にふさわしいモデルバーン等の一般公開の在り方が博物館の展示機能と合わせて検討されたという結果を得ている。学内にはこれ以外に明治34年竣工の旧札幌農学校昆虫学教室や明治35年竣工の旧札幌農学校図書館などの「歴史建造物」が多数あり、それらの修理・修復などの保存管理は周辺環境の整備と合わせてキャンパス・マスタープランに組み込まれているが、自然との共生というコンセプトの中で監視していく合同委員会を新たに設置する必要があるだろう。この原稿を書き上げた直後に、旧昆虫学教室や旧図書館など北海道大学の歴史建造物6件が「登録有形文化財」に指定されたとのニュースがもたらされた。

総合博物館と図書館

筆者は1971年以来「深海掘削計画」に参加してきたが、1975年からは国際プロジェクトとして地球表層の70%を占める海洋底の堆積物と基盤岩を掘削・回収して地球環境と地球内部の変遷と原動力(ダイナミックス)を明らかにしようとしている。掘削船ジョイデス・レゾリューション(18,600トン)による2ヶ月の掘削研究航海が終わる度に、航海記録のInitial Reports(平均900頁)とその後18ヶ月間の陸上における研究結果をまとめたScientific Results(平均650頁)の2冊を冊子体として出版してきたが、出版

費用の高騰とメディア(表現手段)の革新によって1999年から全てCD-ROM化しており、近い将来にはインターネット上で処理することになっている。

このように情報メディアが多様化することに伴って、図書館における収蔵形態や情報検索も多様になることが予想される。主題からキーワードへ、さらに目次や抄録による内容へと、情報と検索の階層化が進むにつれて専門的知識がますます必要になる。そして、ついには専門分野毎に分散することになるだろう。そうなれば、中央図書館の管理体制の元に協調ネットワークが構築されることになる。この予測は現在進められつつある図書館の中央統合化計画とは相反する。類似の状況が「総合博物館」にある。本学の研究施設は各地に点在しているので、「総合博物館」が水産学部の「水産資料館」や農学部附属演習林の「森林資料館」、農学部附属植物園などを紹介する窓口の役割を務めるサテライト化を構想している。

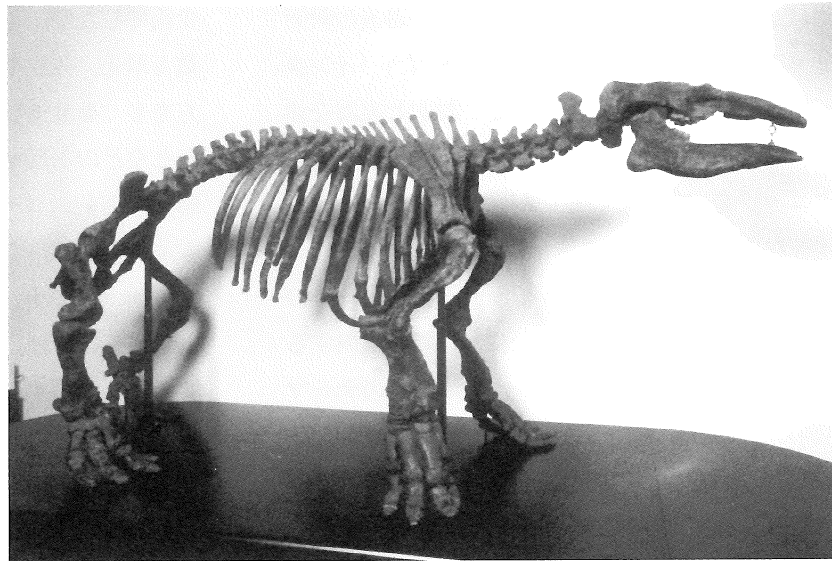
「総合博物館」と「図書館」は共に全学を横断しているだけでなく、機能的には一体化すべきものである。それらは単なる史料貯蔵庫ではなく、そこには人類の英知の結晶である文化財が収蔵されているという認識が必要である。博物館や図書館事業が停滞すると、標本や資料の「囲い込み」によって物置き場と化し、博物や図書情報の発信機能が停止して自閉することに成りかねない。そこは、可能な限り便利で、そして快適であり、時空の距離を超越して、今そこにあつて目や耳や手で確認できるものを楽しめるアミューズメントスペースであることの理解が必要である。

総合博物館ハイライト



2001年に「北海道大学総合博物館」として生まれ変わる理学部本館の正面玄関を入ると中央階段の吹き抜けがあり、真上を見上げると、白壁、白天井のドームが見える。この階段を3階までのぼり詰めると、ドームの天井近くの壁面の四方に、直径1m近くのフランス製の円盤形をした陶製レリーフが東西南北に掲げられており、朝を意味する「果物」、昼を意味する「ヒマワリ」、夕方を意味する「コウモリ」、夜を意味する「フクロウ」が描かれている。これらは研究には一日中、朝も夜もないことを表し、研究と教育の理想としたものである。同じような理想を示すために、アインシュタインを引用してこのドームを「アインシュタイン・ドーム」と呼んでいる。

モデル展示中の「デスモスチルス」(模式標本)世界最初の全身復元標本。1933(昭和8)年に南サハリンの幌内川支流の気屯川上流でほぼ1頭分の骨格化石が発掘され、1936(昭和11)年に全身骨格が復元された。発掘時の様子をモデル展示室で放映中である。この化石によってデスモスチルスが頑丈な4本の足を持っていることが初めて明らか



となった。臼歯の形が「のり巻を束ねたような形」をしていることからギリシャ語のデスモス(束ねる)とスチルス(円柱)を合成して「デスモスチルス」(束柱類)と命名された。太い足は陸上を歩くためのものであり、目がカバやワニと同じように体の上部に位置していることは水中生活をしていた証拠である。また、エナメル質の厚い臼歯は豊富にあった貝類を主食とするためである。温暖な気候の海辺近くで水陸両生の生活をしていた様

子が復元される。全ての生命は海で誕生し36億年の長い年月を経てから陸上に進出したのであるが、その後に海に戻って行ったクジラ・イルカ・ペンギン・アザラシなどの子孫は現在も生き残っている。しかし絶滅してしまった動物も沢山おり、デスモスチルスは約1,900万年前に出現してから700万年後の1,200万年前までに現在型の氷河時代が始まった寒冷化気候による海退現象などの影響を受けて絶滅したのである。

ライブラリーセミナー特集

附属図書館ライブラリーセミナーへの誘い

皆さんは、卒論やレポートのための資料集めに苦戦したことはありませんか？あるいは、附属図書館や学部の図書室で提供されている、データベースの使いかたを詳しく知りたいと思ったことはないでしょうか？

そんな皆さんのために、附属図書館がご用意したのが「ライブラリーセミナー」です。

ライブラリーセミナーとは、皆さんに効率よく自分の求める情報を収集していただくため、図書館が企画・開催している講習会です。「情報」というと堅苦しく聞こえるかもしれませんが、たとえば、「海外の雑誌論文の探し方」「過去の新聞記事を探すためのCD-ROMの使いかた」「インターネット情報の探し方」など、説明と実習を通じ、みなさんの学習・研究に役立つさまざまなテクニックを提供しているのが、ライブラリーセミナーなのです。

図書館では、この「ライブラリーセミナー」の他、図書館の設備や使いかたについてご案内する「図書館オリエンテーション」や、特定のテーマ（例えば「蔵書の探し方」など）に沿った情報収集について、基礎的な方法をご紹介します「ライブラリーガイダンス」も開催しています。本学の学生・大学院生や教職員の方であれば、どなたでもご参加いただけますので、お気軽にお申し込みください。なお、開催予定や申し込み先は、附属図書館や各学部に掲示されるポスターや、附属図書館のホームページ、「楡陰レター」でお知らせしています。

平成11年度のライブラリーセミナーは合計44回開催され、学部学生・大学院生を中心に、述べ242人の方にご参加いただきました。

平成12年度も、「図書館の使いかた」（図書館オリエンテーション）を始めとして、多くのセミ

ナーやガイダンス・オリエンテーションを予定しています。新しく北大にいらっしゃった方、昨年受講しそこねた方、もちろん、おさらいのためにもう一度受講してみたい方も、ご参加をお待ちしています。

また、教官からのご要望に応じ、ゼミ等を単位として、学部学生や大学院生の方々に授業の一環としての講習も行っています。

私が参考調査掛の一員として、ライブラリーセミナーに携わるようになってから、早3年近くになります。当初こそ、ちょっぴりマイナーな(?)企画でしたが、年を追うごとに開催回数も受講人数も増え、先生や先輩からのご紹介で参加される方も多くなりました。また、平成11年度からは、ほとんどのトピックに夜間（学部の授業終了後の時間）開催のコースを設置し、たいへん多くのご参加をいただいています。

毎回、セミナーの後をお願いしているアンケートを見るにつけ、受講生の方々の熱心さには感心するばかりです。「たいへん役にたった」「これから積極的にCD-ROMを使います」など、ありがたいお言葉も数多くいただく反面、「宣伝が足りない」「時間が短すぎる」「説明がわかりづらい」といった、図書館に対してのお叱りの言葉もいただいています。どちらのご意見も、スタッフ一同の励みのもと、今後とも、暖かくも厳しいご意見をお待ちしています。

※ご意見・ご要望はレファレンスカウンター（参考調査掛・内線2973/ref@lib.hokudai.ac.jp）までどうぞ(^^)

図書館の「ひと」と「もの」は、「使った者勝ち」です。さあ、みなさん、ミレニアムの今年こそ、図書館でセミナーを受講してみませんか？

（附属図書館参考調査掛 佐藤依理子）

医学部図書館におけるデータベース検索ガイドンス

1. はじめに

医学部図書館では、昨年9月から、医学部5年次学生を対象とした授業の中でデータベース検索のガイドンスを行っています。このような継続的なガイドンスの実施は医学部図書館としては初めての試みであり、当初は不安の中で始めましたが、開始から約半年が経過し、講師をつとめることにもようやく慣れてきました。

そこで本稿では、ガイドンスについて紹介するとともに、ガイドンスを通じてわかったこと、今後の課題などについて述べてみたいと思います。

2. ガイドンスの概要

ガイドンスは、医学部5年次学生を対象とした授業「臨床実習コース」の中の「医療情報学実習」の一部の時間を使って行っています。実習を担当する櫻井恒太郎教授（医学部附属病院・医療情報部長）より依頼があり、それを受ける形でガイドンスは始まりました。

医療情報学実習の目標は「臨床実習指針」によれば、1) 臨床での問題解決に当たっての情報の集め方、情報源を知り、方針選択の根拠を提示できる、2) 生涯学習のための種々のメディアの使い方を知る、3) 判断樹（decision tree）による方針の評価法を身につける、の3点です。これらの目標を達成するために医学部図書館が担当している部分は、情報を集める際に利用する文献データベースの検索法、具体的には医学中央雑誌CD-ROM版（以下、単に医学中央雑誌と呼ぶ）、MEDLINE（メドライン）の簡単な検索法のガイドンスです。図書館員1名が講師となり、受講生は各回5～6名、所要時間は約1時間20分で、隔週木曜の午前9時より行っています。

ガイドンスを行うデータベース、医学中央雑誌、及びMEDLINEは、いずれも附属図書館においてサービスしている「オンラインCD-ROMデータ

ベース」の一つで、医学関係の文献を検索するのに必要不可欠なデータベースです。医学関係の研究者にとって、これらのデータベースなしには研究が成り立たないといっても過言ではありません。医学中央雑誌は、日本国内で発行された医学、歯学、薬学、及び関連領域の雑誌約2,400誌から文献を収録しており、北大では1987年からのデータをオンラインで検索できるようになっています。またMEDLINEは、米国の国立医学図書館（National Library of Medicine）が作成している医学関係のデータベースで、こちらは米国だけでなく世界中の医学関係雑誌約3,900誌から論文を収録しています。1966年からのデータがオンラインで検索可能です。

医学部図書館にはこれらデータベースの検索用として、医学中央雑誌用、MEDLINE用としてそれぞれ2台、計4台のWindowsパソコンが設置されています。ガイドンスはこの4台のパソコンを使って行なっています。ガイドンスは、最初に医学中央雑誌、次にMEDLINEについて行いますが、同時に使えるパソコンは2台ずつですので、受講生のうち2名が実際に操作し、他の人はその画面を見ながら説明を受ける、という方法をとっています。パソコン一人1台の環境が理想的ですが、現在のところそれだけの台数のパソコンを用意することができません。また仮に用意できたとしても、各データベースは契約上、同時に検索ができる人数が決められていますので、同時に使用するパソコンの台数をあまり増やすと、ガイドンスが行われている時間帯に検索しようとした受講生以外の利用者が検索できなくなる可能性があります。したがって今のところ、現状の受講生5～6人に対してパソコンは同時に2台使用というのが妥当なところと考えています。

3. カリキュラム作成のポイント

ガイダンスを実施することになったとき最も頭を悩ませたのが、どのような事柄をどのように教えればよいのかということと、受講生である5年次学生のデータベース検索に関する知識や習熟度はどのくらいなのかということでした。ガイダンスの内容については、幸いにも参考となるテキストがいくつかありましたので、その内容を限られた時間の中でどのように織り込むかがポイントとなりました。受講生に関しては知るすべがなかったため、データベース検索に関しては全くの初心者であると仮定し、内容を組み立てることにしました。

与えられた時間は1時間半弱と限られており、その中で2つのデータベースの基本的な検索法を説明しなければなりません。データベース一つ一つについて別々に説明をしていたのでは、とても時間が足りません。幸いにも2つのデータベースはどちらも医学関係の雑誌論文を収録したデータベースですし、後発の医学中央雑誌はMEDLINEのいい点を取り入れて作られているようで、共通点が多く見られます。そこで、まず取っつきやすい日本製のデータベースである医学中央雑誌の説明を行うことでデータベースの一般的な構造を理解してもらうようにしました。その後、MEDLINEの説明を行うときには医学中央雑誌と対比させる形で説明を行うことにより時間を短縮し、かつ理解が深まるように工夫しました。

実際にガイダンスを行ってみると、受講生はキーボード、マウスの操作に慣れた人が多く、そのあたりで手間取ることはほとんどありません。筆者が学生だった10年前と比較すると雲泥の差で、今さらながらに近年のコンピュータの浸透の速さには驚かされます。また、すでにデータベースの検索を行ったことのある人も多く、それらの人からは、こちらが「時間がない」「難しすぎる」などの理由で説明を省略したような比較的高度な内容の質問が出されることもあります。

また、ガイダンス中にデータベースが使用できないといったことがないように、ガイダンスの行な

われる木曜の午前中はデータベースの更新作業を行なわないよう、作業を担当する附属図書館システム管理掛にご協力をいただいています。

4. データベース検索のポイント

医学中央雑誌やMEDLINEのようなデータベースは言葉（検索語）を入力することによって検索を行います。このようなデータベースの検索を行う際には、ある共通の重要なポイントがあります。それは、同じ概念を表す場合でもいろいろな言葉で表される可能性があるという同義語の問題と、同じ言葉でも違った文字で書き表されることがあるという問題です。

前者の例としては、例えば“老年期痴呆”という概念を表す言葉には、“老人性痴呆”、“アルツハイマー型老年痴呆”、“Alzheimer型痴呆”、などいろいろなものがあります。後者の例としては、例えば“肺癌”という言葉は、このように漢字のみで書き表されるほかに“肺がん”、“肺ガン”のようにひらがなやカタカナ混じりで書き表されることがあります。したがって、検索を行う際にはこれらのことに十分注意しなければなりません。

このことに対する一つの解決策は、考えられる限りのバリエーションについてそれぞれ検索を行い、最後にそれらの和集合を取ることです。しかしこの方法は、“肺癌”のようにバリエーションが3つくらいならばいいのですが、“老年期痴呆”のようにバリエーションが多くなると、もれがでないようにするのは大変になってきます。

これらの問題を解決するのがシソーラスと呼ばれるものです。同じ概念を表す言葉として複数の言葉があるときに、その概念を表す言葉としては他の言葉ではなくこの言葉を採用する、として決められた言葉がシソーラスです。“老年期痴呆”の例では、“痴呆-老年期”がシソーラスになります。また“肺癌”のシソーラスは“肺腫瘍”です。医学中央雑誌やMEDLINEは、いずれもシソーラスを使用した検索ができるように作られています。

そこでガイダンスでは、検索を行なう際には自分が検索しようと思っている概念をシソーラスで

表すとどうなるかを考え、できるだけシソーラスを使って検索を行なうことが必要とする文献を効率よく検索するためのポイントである、ということ強調するようにしています。

5. おわりに

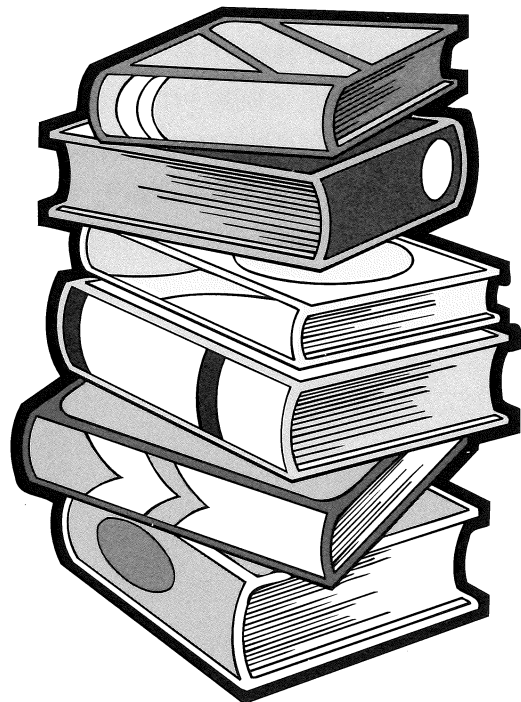
インターネットの急速な普及もあり、データベースの検索システムは数年前と比べるとかなり使いやすくなってきています。マニュアルなどを見なくても何か言葉を入力して検索を実行すれば、とりあえずその言葉を含んだ論文を探してくれますので、ややもすれば、それで十分であると思ってしまう危険性があります。

データベースの検索を独力でマスターしたような人でも、前述したシソーラスを使った検索を行なっている人はまれです。これらのことを考えると、ガイダンスには、全くの初心者には検索の基本をマスターしてもらうことのほかに、一通りの検索ができる人に対して、自分一人ではなかなか気づきにくいポイントを解説したり、独力で身につけたバラバラな知識を系統立て、より応用がきくものとして再構築するという意味もあるのだと気づかされます。

もはやデータベースの検索は一部の研究者や図書館員だけが行なうものではなく、誰もが行なえるような一般的なものとなってきています。その意味で、現在5年次学生の授業の中だけで行なわれているガイダンスの対象を、教官、院生、他年次の学生、講座の秘書など、より広げる必要があります。そのためには、ガイダンスを行なう場所の確保、多くの利用者が参加しやすいようにするには実施する時間帯をどうすればよいかなど、検討しなければならないことが多くあります。また、時間の都合でガイダンスに出席できない人のために、データベース検索上のポイントを解説したマニュアル等を作成する必要もあります。また、単に紙のマニュアルだけではなく、ホームページ上からも見られるような動画や音声を含んだ教材の作成は可能かなど、検討すべき点は数多くあります。

教官からの申し出を受ける形で始まったガイダンスですが、始まりはどうであれ、それをさらに発展させていくことが図書館の果たさなければならない役割ではないか、と考えている今日この頃です。

(医学部図書閲覧掛 松尾 博朋)



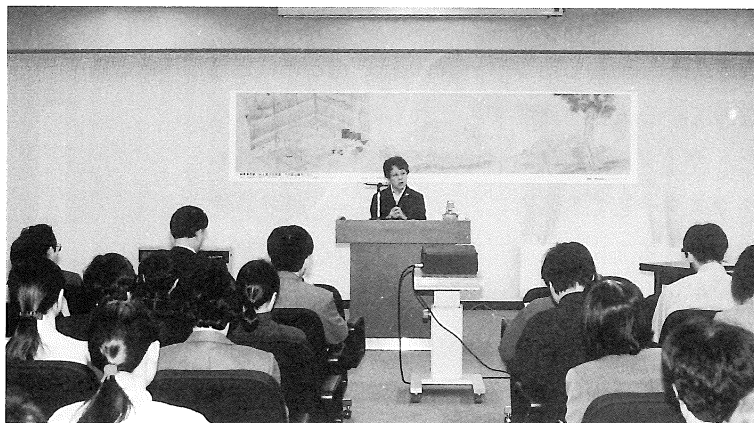
お知らせ

北海道大学附属図書館講演会が開催されました

○平成11年度第1回

平成11年11月18日(木)附属図書館会議室において、道内国立大学等の図書館職員を対象とした、北海道大学図書館講演会(平成11年度第1回)が開催されました。

相山女学園大学教授松村多美子氏による「図書館資料の保存に係る諸問題について」と筑波大学附属図書館情報システム課課長補佐栗山正光氏による「筑波大学における電子図書館の構築について」の講演があり、道内の国大学、高等専門学校及び本学図書館職員から約50名の参加がありました。



○平成11年度第2回

平成12年1月27日(木)附属図書館会議室において、道内国立大学等の図書館職員を対象とした、北海道大学図書館講演会(平成11年度第2回)が開催されました。

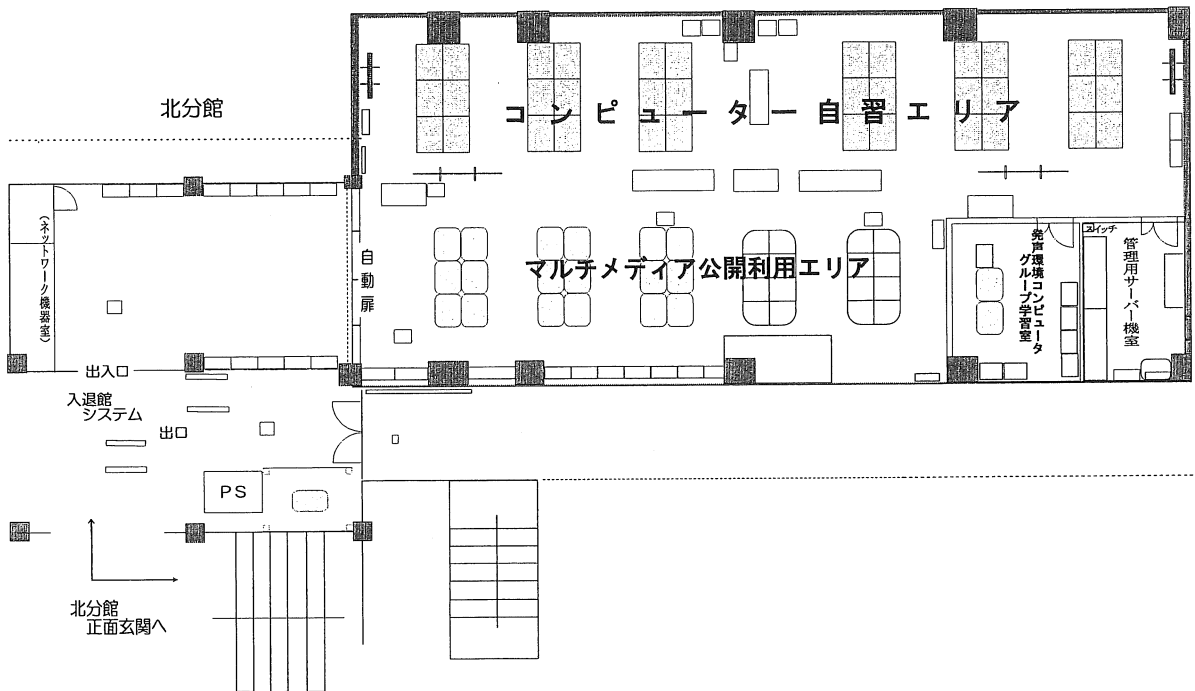
広島大学附属図書館事務部長久野木氏による「広島大学における業務集約化について」の講演があり、道内の国大学、高等専門学校及び本学図書館職員から約40名の参加がありました。



北分館の閲覧室改修について

このたび北分館2階にマルチメディア公開利用室が開設されました（情報教育館2階）。また4階が全面的に改修され快適な閲覧スペースとなりました。

マルチメディア公開利用室（附属図書館北分館2階）



1. 利用時間 平日 午前9:00－21:00
 土曜・日曜 午前9:30－17:00

2. 利用設備等

1) コンピューター自習エリア

情報処理教育用のパソコンが36台備えられています。利用については、情報メディア教育研究総合センター発行のパスワードで管理しています。

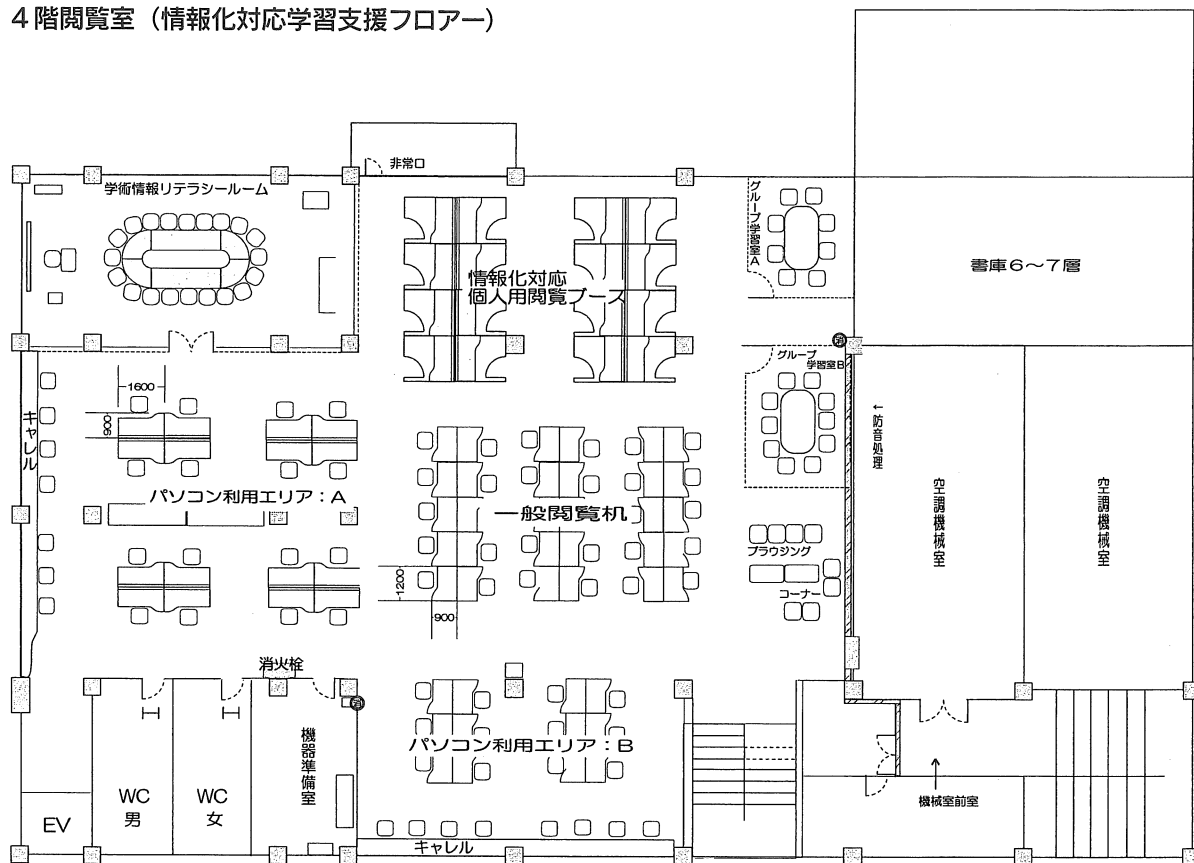
2) マルチメディア公開利用エリア

室内に配架してあるマルチメディア資料（ビデオ、LD等）を自由に視聴できます。

3) 発声環境コンピューターグループ学習室

語学教材（録音テープ、CD、ビデオ）が利用できます。

4階閲覧室（情報化対応学習支援フロアー）



1. 利用時間 平日 午前9:00 - 21:00
 土曜・日曜 午前9:30 - 17:00

2. 利用設備等

1) 情報化対応個人用閲覧ブース（16ブース）

幅1600、奥行1700、高さ1530のパーティションで仕切られ、ネットワークも利用できる閲覧ブースです。12ブースについてはネットワークを利用できるパソコンを備えています。

ご利用に当たっては2階総合カウンターに申し出てください。

2) パソコン利用エリア

A. ワープロ、表計算ソフトを搭載したパソコンが備えています（16台）

B. 他に各机に電源とネットワーク接続口があります。自分のノートパソコン等をネットワークに接続して利用できます（12席）

3) 一般閲覧スペース

個人用閲覧机が30席あります。ここでは電卓等、操作音が生じる機器は使用しないでください。

4) グループ学習室（2室）

3名以上のグループで利用できます。総合カウンターに申し出てください。

5) 学術情報リテラシールーム

文献情報利用の講習会等を開催します。（パソコン5台）

教官著作寄贈図書

1999.11.1-2000.2.29

[本 館]

(名誉教授)

山崎 岐男	グレイの生涯	考古堂書店	2000
-------	--------	-------	------

田中 彰	顧みて、いま	北大図書刊行会	1999
------	--------	---------	------

(法学部)

奥田 安弘・川島 真・鈴木 賢ほか著			
	共同研究 中国戦後補償	明石書店	2000

高見 勝利	宮沢俊義の憲法学史的研究	有斐閣	2000
-------	--------------	-----	------

(経済学部)

吉野 悦雄	複数民族社会の微視的制度分析	北大図書刊行会	2000
-------	----------------	---------	------

(工学部)

横山真太郎ほか著	からだと熱と流れの科学	オーム社	1998
----------	-------------	------	------

(理学部)

徳永 正晴・和田 宏共著			
	理工系の物理学	学術図書出版社	1999

(教育学部)

西本 肇	学校という〈制度〉	窓社	1999
------	-----------	----	------

竹田 正直	サハリン州の社会経済と大学改革	共同文化社	2000
-------	-----------------	-------	------

(言語文化部)

大平 具彦	トリスタン・ツアラ	現代企画室	1999
-------	-----------	-------	------

[分 館]

(経済学部)

吉野 悦雄	複数民族社会の微視的制度分析	北大図書刊行会	2000
-------	----------------	---------	------

(教育学部)

竹田 正直	サハリン州の社会経済と大学改革	共同文化社	2000
-------	-----------------	-------	------

ご惠贈誠にありがとうございました。今後とも図書館資料の充実のため、皆様のご協力をお願いいたします。

会議 (11.11.1 ~ 12.2.29)

【学 内】

◎図書館委員会

○第177回〈11月11日(木)〉

議題

- 1 北分館4階の改修について
- 2 大学院重点化に伴う院生用閲覧席の確保について
- 3 次期逡及入力事業について
- 4 総合メディア交流棟の利用開始に伴う利用規程の改正について
- 5 附属図書館所蔵資料の不用決定について
- 6 その他

附属図書館図書選定内規の改正について

報告事項

- 1 北分館委員会について
- 2 図書館資料の特別展示公開検討小委員会について
- 3 事務改善検討小委員会について
- 4 外国雑誌問題検討懇話会について
- 5 平成11年度後期常設展示について
- 6 国立七大学附属図書館協議会及び同事務部課長会議について
- 7 その他

電子ジャーナル等の利用について

○第178回〈2月3日(木)〉

議題

- 1 大学院重点化に伴う院生用閲覧席の確保等本館の改修について
- 2 北海道大学附属図書館利用規程の一部改正について
- 3 平成12年度概算要求事項について
- 4 平成12年度本館及び北分館の開館予定について
- 5 その他

北海道大学附属図書館委員会規程の一部改正について

報告事項

- 1 北分館4階の改修について
- 2 図書館資料の特別展示公開検討小委員会について
- 3 外国雑誌問題検討懇話会について
- 4 その他

平成11年度大型コレクションについて

◎北分館委員会

○第129回〈2月29日（火）〉

議題

- 1 分館委員の選出について
- 2 北分館視聴覚室利用要項の廃止について

報告事項

- 1 2階及び4階改修状況と改室計画について
- 2 高等教育機能開発総合センターとの図書業務に関する申合せについて

◎図書館資料の特別展示公開検討小委員会

○第4回〈1月25日（火）〉

◎図書事務改善検討ワーキンググループ

○第1回〈8月4日（水）〉, 第2回〈11月30日（火）〉, 第3回〈1月20日（木）〉,
第4回〈2月16日（水）〉

【学外】

◎国立大学図書館協議会

○理事会等〈11月25日（木）～26日（金）〉（名古屋大学）

◎学術情報センターとの業務連絡会〈11月24日（水）〉（東京大学）

◎平成11年度国立大学附属図書館事務部長会議〈1月20日（木）〉（群馬大学）

◎北海道地区大学附属図書館事務（部・課）長会議〈12月3日（金）〉（北海道大学）

◎北海道地区大学図書館協議会

○第42回図書館職員研究集会企画委員会〈10月12日（火）〉（北海道大学）

○第1回幹事館会議〈2月24日（木）〉（北海道大学）

人事往来

【平成11年12月1日付け異動】

〔採用〕

金 田 志 保 附属図書館情報サービス課参考調査掛
東 朋 子 農学部図書閲覧掛

〔辞職〕

小 山 千恵子 農学部図書閲覧掛

北海道大学附属図書館報「榆蔭」(ゆいん) 106号 平成12年3月30日発行

〈編集〉 「榆蔭」編集委員会

〈発行〉 北海道大学附属図書館 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL : 011-706-2967 FAX : 011-747-2855
ホームページ <http://www.lib.hokudai.ac.jp>